

二、降りつむ雪は窓につもりて

家屋（カザルマ）うもるゆきのはら

父母よはらから幼きともよ

帰還らぬわれをいかにまつ

哀愁の凍土

広島県 藤森 隆行

追記

私は、本年七月二日に舞鶴の地を訪れた。特別の観光地ではないが、復員して四十年に当たり、あの當時を偲ぶためであった。

かつて復員の日、第一步を踏みしめた平棧橋、引揚援護局跡等は、四十年の星霜を経た今日、昔日の面影は何一つとして残されていなかったけれども、港を見下ろす小高い丘の一角に、舞鶴引揚記念館があることを知り、入館した。数多くの資料品とか写真が展示されていて、當時を偲び、一人の感慨深きものがあった。諸兄もついでの際には立ち寄られて、我々の経験した姿を見ていただきたいと思う。

一 さらば、ハルビン 哈爾濱

映画館を出ると、暮れなずむ大陸の暑い日差しもようやく陰り、馬家崗バカコウへの下り坂を歩む若い二人に涼風が爽やかでした。

ナターシアと映画を見ての帰途でした。ナターシアとは彼女の愛称で、ロシア人は親しみを愛称で呼ぶ風習があります。金髪の明るいロシア娘で、年は確か十六か七だったと記憶しています。もう結構大人のムードがあつて、魅力的なグラマーな娘でした。二人とも見かけは大人でしたが、まだ純情そのもので、手を握ったこともありませぬ。彼女は私が住んでいた家の大家さんの孫娘でした。一年ほど前から知り合い、時々日本語とロシア語の交換教習などをしていました。

昭和十九年八月の頃です。帝政ロシア時代の名残を

多くとどめていた旧満州は東北の街ハルビンでのことです。駅前の緩やかな坂道を上りつめた高台に、かつての帝政時代を象徴するロシア正教の中央寺院が荘厳かつ華麗な姿を誇り、辺りを睥睨していました。

ハルビン駅など赤煉瓦の建造物が目立ち、石畳の街路に緑樹映える美しい街並みなどはいまも強く印象に残っています。キタイスカヤ、スングアリーなどと、街河、建物などにロシア名も多くありました。革命後のソ連邦を嫌いここを終焉の地と定めた多くの日系ロシア人が、営々と生活にいそんでいる。夢もロマンもある若人の街、ハルビンです。

一方戦局は風雲急を告げていました。徴兵検査も一年繰り上げられて、私はその年の十二月一日早朝、白城子の教育隊に入営せよとの通知を受けていました。当時の若者は一死報国の覚悟で兵役に服したものです。私は久々に故郷へ帰り、祖先の墓に詣でて親戚知人とも覚悟の別れを済ませ、全ての準備を整え待機していました。

十一月三十日、スングアリー鉄橋を北のソ満国境へ

疾走する夜行列車の中이었습니다。真っ白に凍てついた車窓の水を爪先で削り、暗闇の中に浮かんでいるハルビンの街灯りが見えなくなるまで覗き込んでいたのを思い出します。

二 哀れ、新兵さん

十二月一日の早朝。草原に吹く師走の寒風に迎えられ、早朝の白城子駅に降り立つと、駅の正面の高台に教育飛行隊が見えました。歩哨に一礼して宮門に足を入れたとたん、何か背筋にゾクッとする緊張感のようなものを感じながら、娑婆とおさらばしました。

六カ月の基礎教育は三カ月に短縮され、起床から消灯まで顔も変形変色するビンタに明け暮れる厳しい内務日課に並行して、重い防寒装具に執銃帯剣の完全武装で、吹雪の雪中に伏せては駆け、駆けては伏せ、散開射撃の厳しい戦闘教練が繰り返し行われました。足蹴にビンタに体罰、何でもあり。ないのは休日だけです。白を黒と言われてもハイの返事と服従あるのみです。軍隊においては釈明という言葉はありません。

年が明け一月には専科教育のため齊齊哈爾の野航へ

派遣され、三月原隊復帰後、四平の新設部隊に配属、関東軍から北支派遣軍第五航空軍に編入され、北京郊外の南苑飛行場へ移駐。ここで沖繩決戦の特攻出撃を二度ほど見送りました。現代では犯罪を犯しても少年法に守られ罪にも問われない、そんな同年代の少年が、爆装した飛行機に片道の燃料を積んでもらって、青ざめた顔に無理な笑みを浮かべ、健気にも決別の敬礼を残して機に駆け上がり、滑走路を疾駆しながらなおも手を振り、二度と帰らぬ大空へ消えていきました。あの若者たちの姿は脳裏に焼き付いております。

六月、北京を進発、輸送列車に乗せられました。本土決戦のため日本へ集結するんだという飛語が車中のあちこちで囁かれましたが、着いてみれば朝鮮の宣徳飛行場でした。

八月十八日、早くも進駐して来たソ連軍により、この地で武装を解除されました。

三 戦いすんで

終戦後は、飛行機の影もない広い格納庫に畳を敷いて収容されていました。

ある日の夕食後です。四、五人の古兵が隅の方で酒盛りをしているようでしたが、ややあって七転八倒の苦しみを始めたので、慌てて皆で医務室へかつぎ込む大騒ぎになりました。工業用のメチルアルコールを飲んでいたようで、二人は亡くなり、残りの人は盲目になったと聞きました。

進駐後間もなく「ダモイ・トウキョ」の飛語があちらこちらで飛び交いました。後日「ダモイ・トウキョ」の流言はソ連上層部から出たものと知りました。約一月半後「ダモイ」の声にみな喜び、徒歩で宣徳を出発、興南に入り、町の小学校に収容されました。

ここでひょんなことから通訳をする羽目になりました。宣徳でちょっとした脛の怪我を化膿させた私は、医務室通いをしていました。ある日、一人のソ連兵が医務室へ来て軍医にペラペラ喋りだしたのです。軍医のそばにいた私は見かねて口を出した、その結果が通訳というわけです。ソ連の指揮官が通訳を探していたときで、彼が私との出会いを話したそうです。呼び出された私は「聞いてのとおり片言の単語を並べるだけ

で通訳などできません」と再三再四断つたが、他に誰もいないからと押し切られてしまったような次第です。

「ダモイ・トウキヨ」と言って私たちを喜ばせてここまで連れて来て、今更通訳でもないだろうと思つたのは私だけでしょうか？

四 果てしなく続く嘘

三日後でした、「ダモイ・トウキヨ」の船が来たと言うので「さあいよいよ帰国だ」と皆喜び勇んで港へ来てみると、ソ連旗を掲げた貨物船が接岸されていて、大勢の現地人が船積みの真つ最中でした。

乗船すると下士官と兵は船倉に下ろされ、甲板に出ることを禁じられ、各昇降口にはマンドリン銃を持ったソ連兵が配置されました。日本の将校には甲板の一室を与え、私も同室するように指示されました。

十月二日、興南を出港しました。日本へ向かつて航行していれば陸地が右側に見える筈、なのにいつまで経つても左に見える。利口とは言えない私の頭でも、今までの話は嘘だと思いました。将校の方たちも兵の動揺を気にしてか口にこそ出ませんが、おおよ

そのことは察知しておられるようでした。

ウラジオストック沖で錨が下ろされると、やがてソ連輸送指揮官は迎えのランチに乗船して港へ向かうのが見えました。

翌早朝、錨を上げて間もなく指揮官の呼び出しがあつて、日本の将校と私は彼の船室へ入りました。「貴官ら〇〇人と兵四千人を軍捕虜としてナホトカまで輸送する」旨の通達があつて、同時に船倉の兵も甲板に出ることを許されました。覚悟はしていましたが、はっきり言明されるとがっかりするものです。

それからの私は大変でした。四千人の兵隊を、千人単位にして四個大隊を編成するというのが彼らのプランです。各原隊をバラバラにしたうえ、あちらこちらに混入して、新しく第九・十・十一・十二の呼称で四個、労働大隊を編成しました。旧知の原隊仲間が団結するのを恐れてか？その理由は分かりません。それにしても知らない言葉が次々に出て、泣きたい思いの数時間、気が付くとやっと終わっていたようなことでした。もっと真面目にナターシアと勉強しておけば良かった。

たと、後悔先に立たずです。

五 シベリアへ

十月七日夕方、ナホトカ岸壁に接岸すると、すぐに上陸が始まりました。携帯食糧で飯盒炊飯をして食事がすむと、入ソ第一夜は埠頭のコンクリートが寝床になりました。シベリアの十月の夜は寒く、防寒外套を頭まで引き上げ海老のように丸くなって震えています。下からの冷え込みでなかなか寝付けるものではありません。岸壁を打つ波音はひたひたと、エレジーを奏でてくれているように聞こえます。遠くに聞こえる列車の汽笛は長く尾を引き消え入るようなもの悲しく、しんみりと胸に染み入るようでした。

少しまどろんだようです。「泥棒、泥棒」と連呼が聞こえたような、現実に目覚めるまではなお数秒かかっていたようです。日ソ両将校は、遅い私を待っていました。

四千人が温め合うように一塊になって寝ているのを開んで数人のソ連兵が立哨していたのに、枕代わりにしていた僅かばかりの身の回り品を引ったくられたの

です。

「貴官の部下が数人立哨していて、なぜ分からなかったのか、敵兵ならどうなる」「いま兵が追って行ったから間もなく分かるだろう」という返事でしたが、どうせ馴れ合いでやったことでしょう。思ったとおり結局は有耶無耶にされてしまいました。「勝てば官軍、負ければ賊軍」と言いますから、ここでは彼らが官軍というわけです。

翌朝何事もなかったように全員埠頭に整列しました。第十・十一・十二の三個大隊は先発して、九大隊は残って荷下ろしをするという指示がありました。私は十一大隊所属ですが、荷下ろしに残されました。マンドリン（連発式小銃）を持つ多数のソ連兵に前後左右を囲まれ、未知のシベリア大地へいっばいの不安を胸に次々に去って行く三個大隊を甲板から見送りました。衣料に食糧に機械に工具に雑品、数十頭の馬から、かまどの灰までと言いたいほどの種類と数量の積み荷には驚きました。

余談になりますが、旧満州吉林に日本が建設し、当

時東洋一と言われていたあの豊満ダムをも解体して、
関連技術者ともども自国へ運び込んだと聞いております。
私たちの入ソは海路でしたが、幾つかあるソ満国
境の鉄路から、人と荷物を満載した貨物列車が連日延々
と国境を越えてソ連入りして行くのを見た人は大勢い
たようです。『どさくさ紛れの火事場泥棒』とはこう
いうことを言うのではないのでしょうか。

荷下ろし作業を終えた第九大隊は小休止ののち出発
して行き、同行するつもりでいた私はまたまた残され
ました。大勢いた同胞が周りに一人も見えなくなると、
改めて寂しさと不安をひしと感じました。しゃがみこ
んで両膝を抱え見るともなしに周りを見ていると、顔
見知りの兵隊が口元を綻ばせて近づき「どうしたフジ
モリ、元気を出せ」と、ポケットから出した新聞紙
を小さく破り、私に見せるようにしてマホルカを紙の
上でならし器用に巻き込むと、唾液で張り付け両端を
ねじる手順を教えて、私にも吸えと勧めてくれました。
「フジモリ今夜はあの小屋で寝る、明日はお前も一
緒に、あの馬を四十数キロ奥地のスーチャンまで連れ

ていく」指さす番小屋の前で、三人の兵隊がマホルカ
を吹かして談笑しているのどかな姿が見えました。元
氣づけてくれるこの兵隊のお陰で少しは気持ちも安ら
いだようです。

翌朝、食後の一服をすると、「出発だ、馬に乗れ」
と一頭与えられました。が、今まで馬との付き合いがな
い私はほとほと困りました。彼らは鞍もない裸馬に飛
び乗り、西部劇のカウボーイよろしく手綱捌きも鮮や
かに数十頭の馬を寄せながらどんどん先へ進みます。
私は馬の背に乘せて貰ったり落とされたり引きずられ
たり、散々苦勞をして遅れまいと後を追いました。

小さな集落にやっとの思いでたどりつくと、近くの
草原で野営することにした彼らは、夕食の支度をして
待っていてくれました。白米に牛乳と食油を混ぜた雑
炊のようなもので、カーシャと言うそうです。

日暮れて部落の娘たち数人が遊びに来て、夜遅くま
で焚き火を囲んでパラライカをひき、歌って踊って騒
いでいました。娘たちは、ロシア語を話す日本人と聞
いて珍しそうに私のそばにきて、何かと話しかけては

一緒に踊ろうとか、日本の歌を歌えとか言っていたが、眠いからと断って、目を閉じましたがなかなか寝つけません。

草を褥しとらに仰向けに寝転び満天にきらめく星を見つめてみると、夜空に父母の、姉兄の面影が次々と浮かんでまた消えます。

夜を幸いに目尻を伝うしずくを拭いもせずに、唇を痛いほど噛んでいました。

夜空に見える月や星はどこで見ても同じはずなのに、あのとときシベリアの夜空に見た星は違いました。やはり異国の星でした。

翌日の夕方スーチャンに着き、収容所まで私を送り届けると、有刺鉄線の向こうで手を振りながら、どこか知らねど捕らわれの馬の終着地点へと彼らは去って行きました。

六 収容所

ここスーチャンには先行していた第十労働大隊が収容されていました。丘の斜面に平屋建ちのバラックがずらりと並び、各戸とも入り口にベチカが一つあって、

両側に手作りの三段ベッド、上段は少し腰を屈めなくてはなりません。一棟に約三千人から四十人収容されていました。外には、仕切りも囲いもない、周りから丸見えの大小兼用トイレが並んでいました。

私が所属する大隊は、これよりさらに奥地のザラトイという山間の集落で森林伐採に当たっているのとこのでした。この本部で二、四日手伝いなどして居候させて貰っていると、山の収容所から迎えの兵隊が来たので、本部の皆さんにご挨拶してザラトイへ発ちました。途中通りかかったコルホーズで芋掘りをしていた日本兵の中から将校が走り来て、「やあ、どうしたんだソ連兵と二人で、何かあったのか、どこかへ連行されるのか」「そうではありません。夫はかくかくしかじかで私はザラトイの所属大隊へ行く途中です」「ああそうなのか、ロシア語が話せるのなら是非頼みたい。ここに来て一カ月になるが、朝昼晩、掘ったジャガ芋ばかり食べている。いくら食べてもいいと言うが、調味料は一切何もくれない。栄養も偏り飽きもする、ただ満腹感だけなんだ。私を信じて我慢してくれてい

る兵たちが可哀想でならない。私が身振り手振りでも何度か話したが、埒があかない」と。

話を聞いていて、酷いと思いました。一カ月もの間、三度三度芋ばかり食っては見るのも嫌になって当たり前、勢い込んで所長に会って話してみました、所長曰く「食糧庫には何も無い、何度も連絡しているが中央から何も送ってこないんだ」。そのうえこの宿舎は、地面を掘ってその上に天幕を張ったお粗末なもので、霜が降りるまでに芋を掘ってしまえとノルマも厳しく、重なる悪条件に隊長も兵隊も入ソ早々から辛苦されてきました。「霜が降りるころには本隊へ合流することができると思いますが。もう少しの間です、頑張ってください」と役に立てなかったことを深く詫びてザラトイへ向かいました。すっかり日暮れてからの到着になりましたが、待っていてくれた永井中尉は再会を大変喜んでくれました。

翌日から永井中尉と所長と私の三人は、收容所のすぐ裏手に連なる伐採林をはじめ、少し離れた河川現場や山林鉄道の修復現場など、いずれも山あいの巡回か

ら始めました。現場に労役する同胞は一樣に、「ノルマは厳しく言うが、機材は不良で修理しながら使っている。数も足りない。いつも空腹なので仕事も続かない」、訴えはどれも同じです。幾度か繰り返し言いましたが、これに対する答えはなく「ノルマを上げろ」と言うだけでした。カラスの鳴かぬ日があっても「ノルマ」の声を聞かない日はありません。初年兵が貰ったビンタと同じです。

ザラトイには一月半ほどいて、スーチャンの收容所へ配置替えになりました。永井中尉との別離は辛かったです、これも仕方がありません。今度はソ連兵の同行はなく呑気な一人旅となりました。

スーチャンの收容所に着くと、皆さん暖かく迎えてくれました。ここの所長は温厚そうな年輩の少佐です。スパイにスパイの目が光る怖いソ連邦ですから、例外はなくここにも收容所付きの政治部大尉がおりました。

スーチャンでは炭坑を主体に道路工事、河川工事、鉄道保線工事などの労役でした。ソ連将校と私は各現場を回り、私は同胞の言い分を聞き日本側の立場でも

のを言い、現場監督はサボタージュなどとソ連将校に言い、ソ連将校は言うまでもなくソ側の立場ですから、いつも正面衝突でした。いつでも何処でも監督も兵隊も同じ言葉を繰り返し、聞く私もまた同じことを言う。何が嫌だと言ってもこれほど嫌なことはありませんでした。空腹と寒さに耐え、ノルマと闘っている同胞にソ側の言うまま通訳するなんてできる訳がないでしょう。私にはできません。私も抑留されている日本人です。日本の将校方も、これが一番辛い、情けない、嫌だと、嘆いていました。

入ソした翌年から将校と私は、近辺だけですが、顔パスで単独の外出を許されました。

ソ連邦では、ない物ねだりはしない国民性なのか、それとも井の中の蛙なのか、いずれにしても抑留中の三年間、列車以外の乗り物は、自動車はもとより自転車さえ見た記憶はありません。軍人、民間人を問わず徒歩を苦にする様子は更々なく、当然のように歩いていました。

居住区域を出るときは許可申請が必要とされ、職業

にも学業にも選択の自由は全くなく、言論においてもまた然り、国民皆労、すべてがノルマに酷使されていて、全く自由のない国だと思いました。

真っ黒になって坑内から上がってくると、シャワーを使います。これはありがたいことなのですが、八時間待っていたソ連兵は早く帰りたいものだからシャワーをせかせ、五分で整列するように伝えろと言います。彼らも日本語の一・二・三から十くらいまでは覚えていたので、私も考えました。五という数字を使って「五分以上かかってもいいですから適当にやって下さい」と伝えていました。

ある日、日ソ両将校と現場監督と私の四人で坑内に入り、坑道掘削現場へ回りました。驚いたことに土砂降り状態の漏水です。今までも漏水現場がありましたので、その都度雨具を要求してきましたがいつも梨のつぶてです。この度の漏水はいつもとは桁違いです。ソ連将校と監督に何が何でも雨具の支給をするようにと強硬に申し入れました。「雨具はないんだ、もう少しでこの岩盤は抜けられるから我慢しろ」と現場監督。

「この現場で終わりじゃないだろう、また次の漏水現場があるだろう」。

こんなやり取りは今までに何度かやっているのに、あの日は興奮して、私は殴りかからんばかりの勢いで迫りました。彼らは、どのようなことがあっても坑内では絶対手を出しません。坑内暴力には法的な敵罰があるからです。今は老いぼれた私ですが、あのころはまだ現役兵の覇気がありました。遂にスターリンの批判まで口から出てしまいました。ソ連邦ではタブーです。恐らく極寒僻地の矯正収容所送りは免れないだろうの思いが一瞬脳裏をよぎりました。

翌日政治部大尉に呼び出され、所内の空き室へ出向くと、大尉と見知らぬソ連軍少尉がいて「私は戦時中東京に潜入してスパイ活動をしていたから、日本の事情はよく知っている。大尉の質問に嘘は言うな」と日本語で脅したのは朝鮮の人でした。大尉は黙したまま机に置いた分厚い本をじっと見つめている。恐らく我々のリストでしょう。

大尉は職掌柄日ソ双方から総すかんを食っている、

そんな彼に私が初めて会ったのは当所に来た翌日でしたか、本部を出たところではったり出会い、敬礼してそのまま行き過ぎようとする。「フジモリーか、そうだろう、少し話そう、煙草は？」と、出してくれたのは入ソ以来初めて見る両切りの煙草でした。それからも会う度に煙草を勧められ、しばしの雑談をしたものです。煙草を貰ったからではないが、私はそれほど彼を嫌ってはいませんでした。

そのようなことが幸いしたかどうかは知る由もありませんが、朝鮮将校の脅しなど関係なく、殆ど尋問らしい尋問もありません。「フジモリー、お前は体格がいい、明日から炭坑に入って採炭夫としてノルマを上げろ」。通訳を辞めさせて炭坑に入れることがソ連では重い処分になるのでしょうか。下手な単語を並べて同胞に気を遣っているよりも、みんなと一緒に労働している方が私の性に合っています。これが処分と言うならむしろ礼を言いたいくらいです。「帰ってもいいんですか」と念を押して聞きたいような気持ちを押さえて外に出ると、ほっと一息大きなため息が出ました。

二十一年六月一日からの入坑でした。今まではソ連兵と雑談しながら列外を歩きましたが、通訳でなくなつた今日からは、列に入つて収容所を出ました。顔なじみの監視兵が道々「フジモリーどうしたんだ」と問いかけてくるので、事のあらましを話すと「ばかだなあ、でも軽く済んだと思うよ」と肩を叩いて列から離れしました。ソ連人の多くが陰でスターリンの批判をしていることは私も知っていました。

一つエピソードがあります。私が少しばかりロシア語が話せるものですから、見知らぬ人も話しかけてきました。そんな中に老人ホームから坑内雑務に来てゐる年寄りがおりまして、誰もいない坑道でばったり出会つたとき、発破避けの窪みに私を誘い、ライトを地面に伏せ一寸先も見えない暗闇で「ドイツがソ連まで攻め込んだとき、どうして日本はシベリアから攻めなかつたんだ。あのときならソ連は負けていた。お前達も今頃シベリアに来ていないだろう。帝政時代のロシアが懐かしい」と回顧していました。老人ホームで生活しながら労働に出てくる、これもソ連事情の一つで

しょうか。

坑内で拾つたゴム紐でバッテリーを腰に固定してヘッドライトをヘルメットに差し込み、削岩機（十数キロ）とノコギリ（切羽の支柱立てに使用）を肩に掛け、四十五度ほどある急な斜坑を上つて行くのです。

初日は監督も現場の切羽まで来てくれて、「ここが〇〇号切羽だ、覚えておけ、今日はここで切るんだ」監督はライトを炭層に近づけ「フジモリーよく見ろ、黒くて艶のあるこの層が柔らかな部分だ、ここを先に切り込み、それから上下を落とすと楽に切れ、ノルマが上がる、どこの炭層もみなこの要領でやればいい、分かるか」と言つて、数分間実際にやつて見せてくれた後、私の肩を叩いて、「頑張れよ、時間には計測に来るからなあ」と次の現場へ回っていきました。

広い切羽は気味悪いほど静まり返つていて、私一人の気配だけです。教えられたようにライトで炭層を見極め、削岩機をそこに突き立てると、静かな切り羽にダッダッダッと大きな音が反響して、ドサッドサッと黒い塊が次々と暗闇に飲み込まれ、下の坑道にある採

集口へ落ちて行く、その様は実に爽快なものでした。今で言うところストレスも吹っ飛ばすといった感じでした。

初日なので条件の良い切羽をくれたのか、面白いほどはかどり、彼が来て計測を済ませると「フジモリー一三五%もある、初めてにしては良くやった」と自分のことのように喜んでくれました。数日後、収容所で政治部の大尉に会ったとき、そのニュースは既に彼の地獄耳に入っていて、高い鼻を一段と高くして喜んでくれたのには驚きでした。

進駐直後に略奪された物が多く、肌身に隠し難を逃れた物も、抑留が長引くと食糧などに化けていました。帰国するまで持っていた者は殆どいないと思われる時計ですが、通訳をしていた関係で私の腕時計は難を逃れ、最後まで私のものでした。帰国が決まったとき監督に抑留中の厚意を謝し、時計を進呈すると、大変喜んでくれました。

「えっ、貰ってもいいのか、ありがとう、日本へ帰ったら元気で頑張れよ、さようなら」と、整列して炭坑を去る私たちをいつまでも手を振って見送ってくれて

いました。

七 さらば、ソ連邦

収容所を出て後ろを振り返ると、丘の斜面に張り付くようにしてバラックの収容所が立ち並んでいます。石の上にも三年と言いますが、この三年間、極寒に、飢えに、苛酷なノルマに、よくぞ今日まで耐え抜いたものだといささか感傷的になりつつ、嘘はもう沢山、このダモイだけは真実であって欲しいと心から祈っていました。

年中着たきり雀でした。

年中腹を空かせていました。

年中ノルマに泣かされてきました。

蚤や虱とも長い付き合いをしました。

そんな蚤や虱も寄り付かなくなりました。

そんな蚤や虱も栄養失調で死を待つ人の、

血を吸うのは気の毒に思っただけでしょう。

収容所裏の丘の頂に、

三十六柱の御霊が眠っています。

歌のとおり『異国の丘』です。

皆で黙禱を捧げて別れてきました。

「さようなら、さようなら」

御霊をこの凍土に置いて帰ることは、

生涯の負い目になると思います。

隊長は「御霊」三十六柱の本籍、階級、氏名、年齢など克明にしたためていましたが、書き物のたぐいは一切認められないと知るや、急遽「御霊」と同郷の者を呼び集め、一人につき一柱を記憶させ、祖国に帰り着いたときこれらの記憶を集めることにしたのです。

「御霊」の一髪すら持ち帰ることは許されなかったのです。

約二週間ナホトカの大きな幕舎に起居していました。

この間作業はありませんが、連日アクチブによる洗脳教育が行われ、威圧的な尋問と非情な吊るし上げで反動分子のレットテルを貼り、迎えにきた日本の船が目の前の岸壁に接岸されているのに、再びシベリア奥地へ

逆送していました。自分が逆送される立場になってみるがいい。

二十三年七月十六日舞鶴入港の大郁丸で帰還しましたが、十三日ナホトカを出港して公海に出ると、船長がマイクを通して私たちの労をねぎらった後、「この前の船ではアクチブを海へ放り込む事件があった、幸い救出できたが、この船ではそのような事のないように」ということでした。

私たちの次か、その次の復員船から、無事の帰還を喜び舞鶴埠頭に出迎えた家族の前で真っ赤に染まったアクチブがスクラム組んで労働歌を歌い、「敵前上陸」だと喚き騒いだといいます。狂気の沙汰と思います。父母兄弟の住む母国に「敵前上陸」とは、「ふざけるな」と怒鳴りつけたい。祖国の土を踏みたいばかりに、辛酸舐めて耐えた人たちが喜んで帰る祖国です。上陸拒否するくらいなら、初めから帰還船に乗らないでシベリアに永住志願すれば良いものと思いました。

「御霊」が異国の凍土に眠る限り、戦後に終わりは

ありません。

実在した哀愁の凍土「シベリア抑留」を忘却しないでください。

【執筆者の紹介】

大正十三年二月二十一日生

現住所 広島市安佐北区可部南二一五―三の一

昭和十九年十二月一日 満州第一三二五部隊に現役兵

として現地入隊。(白城子)

昭和二十年 一月 齊齊哈爾野戦航空修理廠(部隊

名記憶せず)へ専科教育のため
派遣される。

三月 専科教育終了して原隊に復帰す

る。新設部隊第八三三四部隊
に転属を命ぜられる。(四平街)

四月 北支派遣軍第五航空軍に編入さ

れ、北京郊外南苑に進駐する。

五月 南苑進発、朝鮮宣徳に移駐する。

八月十八日 宣徳飛行場にて終戦。武装

解除さる。(ソ連軍により)

九月二十九日 宣徳飛行場より行軍にて

興安に至り、興安小学校に入る。

ソ連軍の指示により、第十一労

働大隊に編入さる。第十五航空

通信隊、隊長永井中尉以下千人。

十月二日 ソ連貨物船に乗船、興南出港。

九、十、十一、十二の四個労働

大隊、四千人。

十月七日 ナホトカ港上陸。十、十一、

十二の三個労働大隊は先発する。

荷下ろし作業の九大隊に通訊と

して残る。

十月十五日 先発の永井大隊を追いガラ

トイの第五分所に入る。伐採作

業。

十二月三日 スーチャンの通訊とし配置替

えされる。

十二月四日 スーチャン第十一収容所第二

分所に入る。

昭和二十一年六月一日 スーチャン二十四、二十五番

炭坑にて、採炭並びに坑道掘削

作業に従事する。

昭和二十三年六月二十八日 炭坑作業終了の通告を受

ける。

六月三十日 スーチャン収容所を出発す

る。

七月十三日 ナホトカ港にて大郁丸に乗

船、出港。

七月十七日 舞鶴上陸、復員。

本籍地 和歌山県新宮市新宮五六四五番地

終戦時の職名 飛行兵（機関工手）

最も長く居た収容所名 スーチャン市第十一収容所第

二分所

（広島県 山田 浩造）

シベリア強制抑留体験記

広島県 榎上 竹士

生地獄の抑留体験に激しい怒りを持ち続けながら、この事実を永く、正しく後世に伝えるべくペンを執る。私は、ソ連は大国であると小学校の先生から聞かされていた。終戦後、スターリンの命令により、ポツダム宣言、日ソ不可侵条約を踏みにじって旧満州から日本軍人、邦人等六十万人余を拉致、しかも満州から日本で日本に帰すと大嘘を言い、着いたソ連のそれぞれの地で苛酷な強制の労働、加えて零下三十度〜四十度という極寒の中、薄い外套、極くわずかな食糧の上にノルマ、ノルマの罵声、さらに栄養失調の我々日本人をたおれるまでだまし続けて使い、そのため数万人が死すという、言語に絶した非人道的行為は絶対に私の頭から消えず、許すことは出来ない。今、多くの亡くなった方々の御冥福を心よりお祈りするものである。